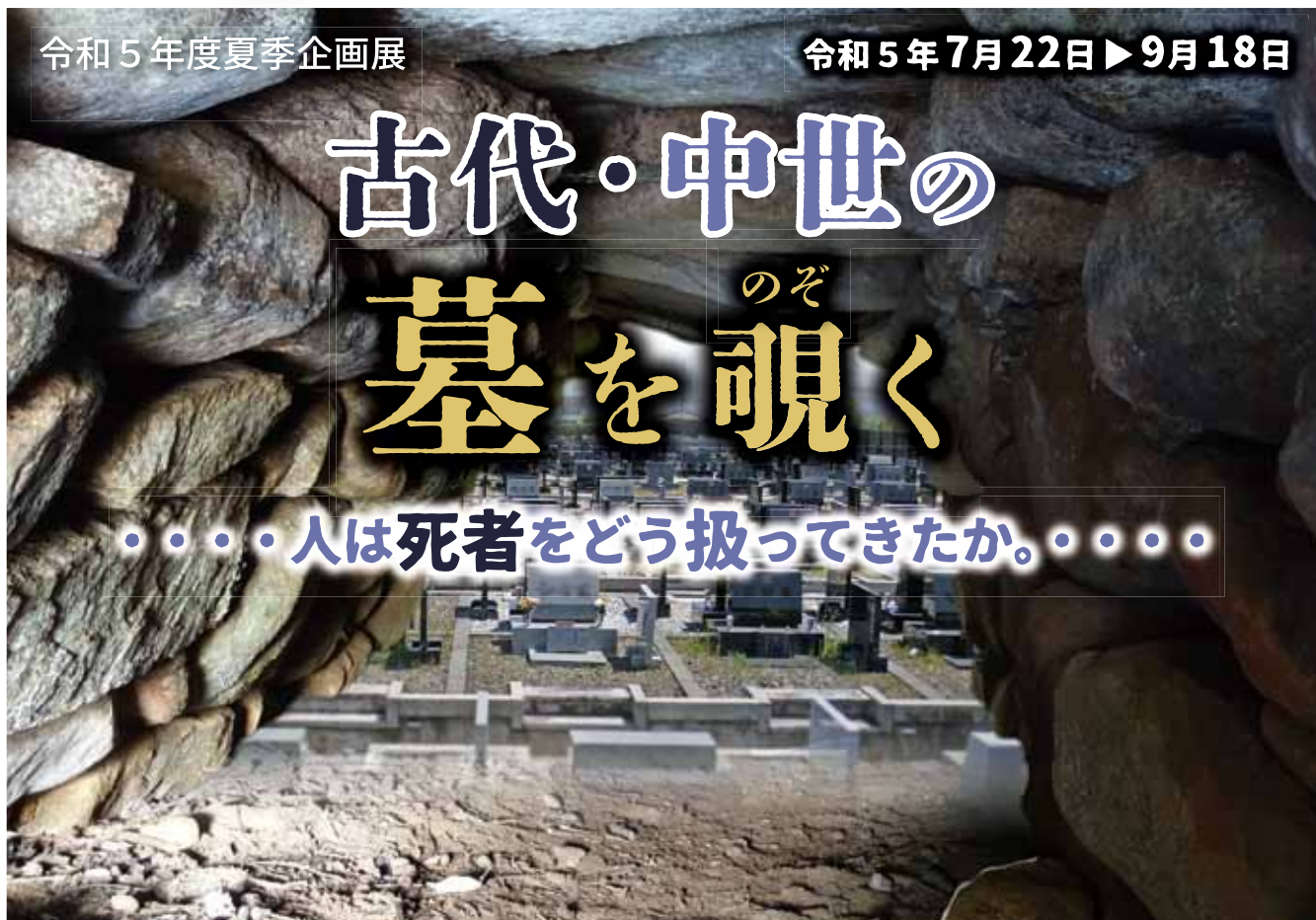


# ふるさと安曇野 きのうきょうあした

No.28 2023.7.22



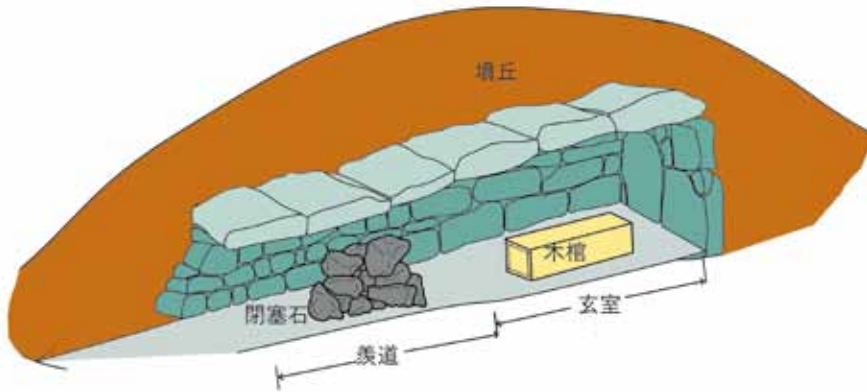
仏教は、生死一如、生きるしやうじいちによと死は一つの如しごと、切り離すことはできないと教えます。死を望まなくても、いつかは死を迎えなければなりません。命に限りがあることを知り、生きていかなければならない、と続けます。

人は死ぬと二つの問題が生じます。遺体をどうするか、そして葬儀をどうするかです。発掘調査から、葬儀の方法はほとんどわかりませんが、遺体をどう扱ったか明らかにできる部分があります。

ここでは、古代や中世の墓を、発掘調査によって覗のぞきみて、当時の人たちが死者をどのように扱ってきたのか、みていきます。最後に、近世・近代、そして現在についてもふれ、私たちが、墓に対して抱えている問題に迫ってみたいと思います。

## 1 黄泉の国への入り口 古墳時代

松本平を一望する中山丘陵の最北端に、全長が66mの前方後方墳ぜんぼうこうほうふん、弘法山古墳こうぼうやま（松本市）があります。紀元3世紀後半、邪馬台国ひみこの女王卑弥呼の時代に造られた古墳です。墳丘の上に穴を掘り、床や壁に石を積み上げ、埋葬する部屋たてあな、竪穴式石室が造られています。立地、規模、副葬品は、埋葬された人物が地域



横穴式石室の模式図

の王にふさわしいと想像させます。縦穴式石室は、古墳時代前期、中期、三世後半から六世紀始めまで造られます。一人のため、個人を埋葬するための墓です。松本平では、弘法山古墳のほか、円墳の針塚古墳（松本市里山辺）、桜ヶ丘古墳（松本市浅間）などがあります。安曇野市内では縦穴式石室は現在のところ発見されていません。

古墳時代後半、六世紀になると、埋葬する部屋の構造が変わ

ります。三方の壁を石で積み大きな平石を天井としてのせる、トンネル状の横穴式石室が造られます。内部は、遺体を葬る玄室と、墳丘の外への通路となる羨道に分けられます。横穴式石室は縦穴式石室と違い、ふだんは石を積んで閉ざされていますが、それをどかして、何人もの人を葬ることができます。

横穴式石室の古墳は、安曇野市内をはじめ、松本平に、数多く造られます。埋葬された人物は、それまでの指導的な役割を果たした有力者に加え、力をつけた有力な農民たちとされます。他の地域から開発のためにやってきた有力者の可能性もあります。安曇野市をはじめ松本平の古墳の多くからは、直刀や鉄鍬（鉄に矢じり）などの武具や、馬具が発見されます。馬に乗った武人、騎兵の性格も持っていたのかもしれない。彼らは、それらを手に入れることが可能な、中央政権との結びつきを持っていたのでしょうか。

最初に古墳を築造した家の長に続いて、妻や兄弟などの埋葬が続きます。次世代の家長になると隣接した場所に古墳を造るといわれます。加えて、新たに力を蓄えた有力者も、古墳を造ることになります。結果的に数多く古墳がまとまって造られます。大室古墳群（長野市）は約2.5km四方の範囲に450基の古墳が墳丘の裾を接するように造られています。これらを群集墳と呼びます。隣接して古墳を造ることは、有力者の結束を表しているのでしょうか。ただ、群集墳の中にも、墳丘や石室の規模、副葬品の内容に違いがあり、家や埋葬された人物に力の差があったと思われる。

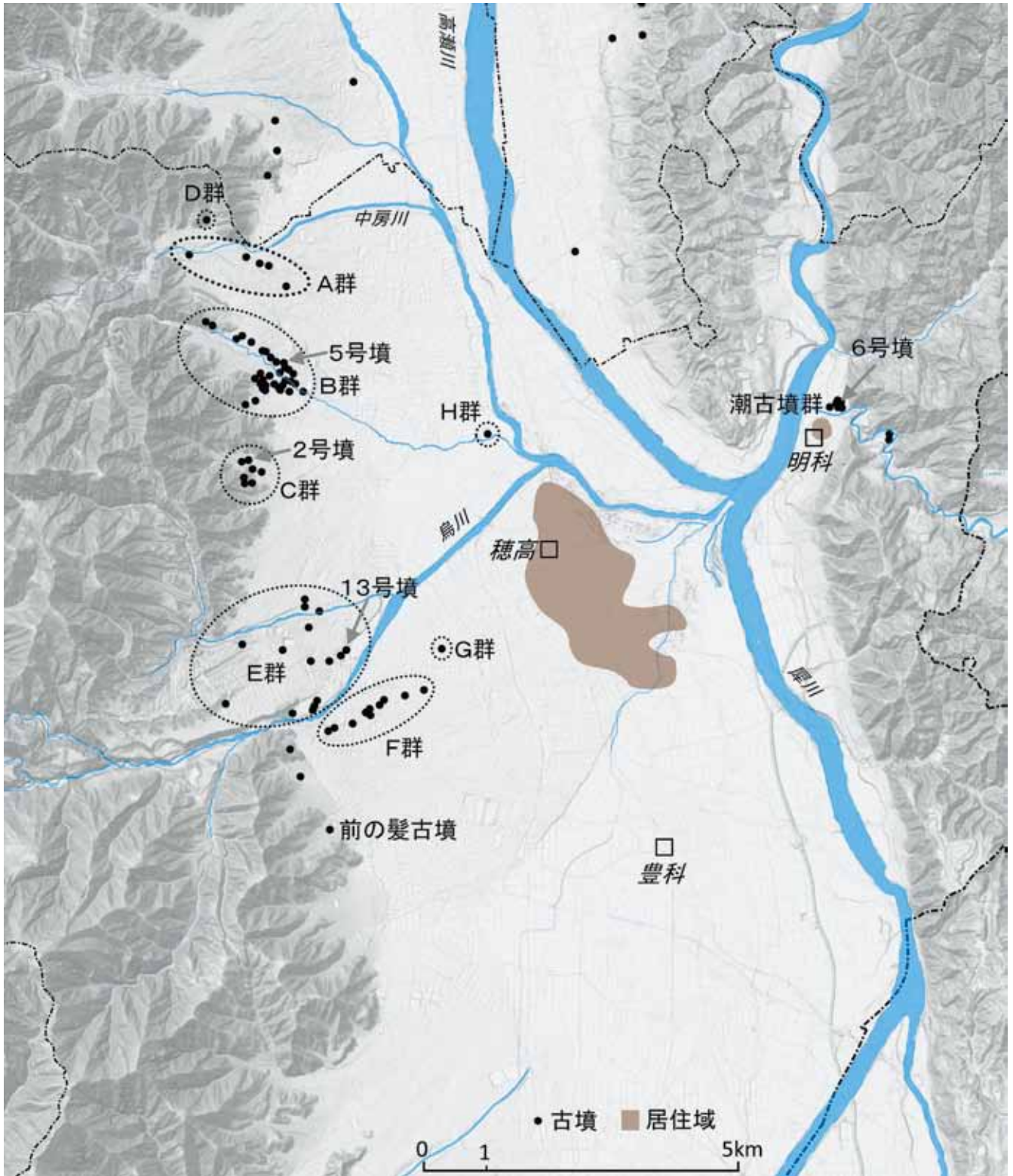
横穴式石室への埋葬を想像してみましよう。

家の長がなくなると、親族たちは、死者を木棺（木で作った棺桶）に入れたり、そのまま石室内に運び込み安置します。次に、死者が、死後の世界で生活に必要なもの、生前の地位を表すもの、玉類などの装飾品、馬具、刀や鉄鍬などの武器、焼き物の食器や貯蔵具などを供えます。次に、入り口に石を積んで閉じます。付近から食器類が発見されることがありますので、石室を閉じた後に死者との決別する儀式が行われたのではないかと推定されます。人々が死者のよみがえりを恐れたからでしょうか。

年月をおいて死者が出ると、ふさいだ石を動かして、横穴式石室の中に遺体を運び入れることになります。石室の奥は、真っ暗くヒヤッと、目をこらしてみると、すでに白骨化した遺体や、時には腐敗した遺体を、目にもすることもあったでしょう。そこに死者を置くことになります。ただ、以前の死者の骨や副葬品は手荒くどかしてしまったりしています。かつて埋葬した死者を敬う意識があったとはいえません。

このような横穴式石室の中は黄泉の国の神話の世界に例えられます。奈良時代に書かれた『古事記』には次のように記されます。

イザナギノミコトは妻イザナミノミコトが死んだため、そのあとを追って黄泉国に向かいました。すると妻は「黄泉の国で食事をしてしまいました。黄泉の国の神と相談してきます。その間、姿を見ないように」といって、奥の部屋に戻ってしまいました。なかなか戻ってこないため、夫は待ちきれなく



安曇野市内の古墳と居住域

なり、約束を破って火を灯して妻がいる奥の部屋に入りました。そこには、ウジ虫がたかり、8人の雷神に囲まれた変わり果てた妻の姿がありました。驚き、恐れた夫は逃げ帰りますが、妻と黄泉の国の軍勢がおいかけてきます。夫は桃の実などの呪力じゅりょくで何とか防ぎながら、ようやく、この世と黄泉の国との境までやってきました。そして、これ以上、妻が追いかけてこれられないよう、黄泉の国の入口を岩でふさいでしまいました。

このように、権力の象徴であった古墳も、遺体を置いて死後の世界に送る施設に変化しました。ただ、数多く作られた古墳も、埋葬された人物の特定はできません。誰が埋められたのかわからない墓です。

長野県内では、六世紀初頭に天竜川下流の飯田地方の前方後円墳に横穴式石室が導入されます。松本平は、6世紀中頃の柏木古墳（松本市中山）や平出2号墳、禰ノ神1号墳（塩尻市）などが、最も古い横穴式石室です。その後、いわゆる飛鳥時代（592～710年）に、横穴式石室が集中して造られます。

安曇野市内の古墳の分布は、穂高を中心に西山一帯、明科地区の大きく二つの地域に分かれます。

## (1) 西山麓 穂高古墳群一帯

穂高地区の穂高古墳群に堀金地区、北に隣接する松川村、北アルプスの山麓部の南北10kmの範囲に100基以上の古墳が確認されています。古墳は、後世の耕作などによって破壊されたものも多く、造られた数はさらに多いと思われます。明治・大正時代には盗掘にあい、副葬品は散逸してしまいました。現在でも、墳丘は目立ちませんが、別荘地内や松林の中に、横穴式石室の一部が露出している場合があります。

石室は、全長が7～9.5m、側壁に石を立てたりせず、幅を狭めたり、側壁の石の積み方を変えるなどして羨道と玄室を区分すること、床に石を敷かないことが共通する特徴です。

古墳を造った有力者が居住したのは、3kmほど東にある柏原・穂高遺跡群だと考えられます。

今回は、穂高古墳群の近年調査や報告された3基と、郡誌編纂に関わって調査された古墳の資料を展示します。

### 穂高古墳群B5号墳（金堀塚）

穂高古墳群は、河川域ごとに分布する古墳をまとめAからG群に分けています。B群は、天満沢川左右両岸に分布しています。

5号墳の調査は、人類学者であり考古学者であった鳥居龍蔵により編纂された『旧南安曇郡誌』（大正12年刊行）に「金堀塚發掘調査記」として報告されています。出土資料は南安曇教育会の保管となっていました。2014年に安曇野市教育委員会が寄贈を受け、保存処理等を実施してきました。

現況は、地表に露出して、奥壁と東側壁の石積みの一部と、墳丘の盛土がわずかに残っています。調査記録から、短径12m、長径15mを測る円墳で、長さ8.6m、幅1.6m、高さ1.5mの石室があったとされます。すべては残っていませんが、豊富な遺物が発見されています。調査記録の略図には、遺体が記されており、時間をあまりおかずに、三人が埋葬されたようです。

副葬品は須恵器の壺類4点のほか、馬具、刀、鉄鏃などがあります。なかには、銀象嵌を施した柄頭と鏢つばもあります。穂高古墳群B5、E6号墳、松川町祖父が塚古墳、後で取り上げる潮6号墳で見つかった



穂高古墳群B5号墳（金堀塚）出土  
銀象嵌柄頭



穂高古墳群B5号墳（金堀塚）出土遺物



穂高古墳群C 2号墳石室



穂高古墳群C 2号墳出土遺物

います。このような銀象嵌は地方の技術では難しく大和政権の工房で作られ、政治的なつながりで地方の有力者へ配布されたと考えられます。そのほか金銅製の馬具も4基の古墳から出土しています。

### 穂高古墳群C 2号墳

C群は穂高有明、富士尾川の上流部の北斜面、400m四方の範囲に7基の古墳が確認されています。

2号墳は、1995年3月から4月にかけて、宅地造成に伴って、穂高町教育委員会が発掘調査を実施し、消滅しました。その後、整理作業が実施され、令和3年度に報告書が刊行されました。標高679mの斜面にあり、自然崩落・森林整備等によって、墳丘は大きく改変され天井石は除かれ石室が露出していました。調査の結果、斜面を削り込んで平面を造り、全長7.6mほどの石室に土を盛り上げた、南北14m、東西13m



穂高古墳群E 13号墳石室

の円墳であったことがわかりました。石室は、遺体を納める玄室と、そこへの通路である羨道を、区別をする立石などはありません。ただ西壁の石の積み方を変えており、その部分からが羨道を意味しているのでしょうか。石材は周辺に多量にある花崗岩が用いられています。

遺物は、閉塞する部分や石室内から、破損が著しい須恵器の食器や壺が発見されています。鉄鏃や直刀などもあります盗掘の際などに動かされたようです。穂高古墳群に多い馬具がみられないことが気になります。遺物の年代は、土器から7世紀後半以降ということになります。

### 穂高古墳群E 13号墳 (浜場塚)

1991年1月から2月にかけて、ほ場整備事業に伴って、穂高町教育委員会によって発掘調査が実施され、その後造成工事によって消滅しました。整理作業が進められ、令和2年度に報告書が刊行されました。E群は、烏川と川窪沢川に挟まれた台地、その北、2km×1.5kmの範囲に、壊滅したものも含めて17基が確認され、E13号墳は最も低い標高628



穂高古墳群E13号墳出土遺物

mにあります。

後世の耕作等によって大きく破壊され、天井石はありませんが、直径10～12mの円墳と想定されました。石室は全長8.6m、東側壁が大きく壊れ、西側壁の石の積み方によって玄室と羨道が区別され、奥から5.4mほどが玄室、幅が徐々に狭くなり、羨道となります。

玄室の最も奥から、追葬や後世の盗掘によって攪乱かくらんされていますが、破損した鉄鍬や馬具が出土しています。ここに最初に埋葬された人物のためでしょうか。玄室の東側から平瓶が出土しています。さらに羨道部から石が被せられるように遺物が出土しています。ほぼ完全な形の使い込まれた轡くつわ1点、直刀3点のほか、杯4点と蓋3点の食器が出土しています。

遺物の破損も少なく、追葬の際の副葬品がそのまま残された可能性があります。馬具や武具は、死者が刀を持ち馬に乗る武人であることを示しているようです。食器は死者があつた世への向かう際の食事のために一緒においたものでしょうか。食器の時期は、8世紀前葉と考えられます。



前ノ髪古墳出土遺物

## まえのかみ 前ノ髪古墳（堀金）

1960年8月に『南安曇郡誌』の編纂に伴って発掘調査が実施されました。

当時の状況は、天井石も一枚しかなく、側壁の石積みもだいぶ崩れ、墳丘の一部が残存しているのみでした。調査終了後に復元がなされています。

石室は、全長が約7m、幅1m、最も高いところで1.5mを測ります。入り口部2.5mほどが狭くなり、その部分が羨道でしょうか。入り口から約3mほど入ったところから死者との別れの儀式に用いた須恵器の食器の杯や壺類がまとまって出土しています。食器の時期は、8世紀前葉と考えられます。

## (2) 潮古墳群

会田川の北、200m四方の範囲に、金山塚（潮）1～5号墳、お経塚古墳の6基の古墳が確認されてい



潮古墳群



お経塚



潮5号墳

ました。1998年に明科町総合福祉センター建設に伴った発掘調査によって、2基の古墳が新たに発見され、それぞれ6号墳と7号墳と名付けられました。また2005年に、町道拡幅工事に伴って古墳が発見され8号古墳と名付けられました。いずれも調査前に、古墳の伝承もなく地表では古墳と確認できませんでした。このような古墳が他にもあり、かなりの密度で古墳が存在した可能性があります。

### 潮古墳群6号古墳

水田にする際に、墳丘、天井石は失われ、石室は大きく破壊され側壁下部の一段のみしか残っていません。隅の丸い方形に巡らした溝の内側を墳丘とすると、南北15m、東西12mの規模になります。地面を掘り込んで石室を造り、底には小石が敷かれています。羨道と玄室の境、玄室の中を前室と区分するために、敷いた小石を敷いた中に大きな石を並べて区分したと考えると、石室の幅1.6m、玄室の長さ3m、前室2.6m、羨道はそこから小石を敷き詰めた4mほどと思われます。

玄室からは、後世の整地などで攪乱されていますが、細かな人骨片が集中して発見され、須恵器の食器や鉄鏃や刀子が重なって発見されています。周溝から死者との別れの儀式に用いられた多量の遺物が発見されています。出土した深さに違いがあり、二回の祭祀があったようです。それらの時期は、7世紀末から8世紀はじめと考えられます。周溝の中からは、銅鏡が発見されています。銅鏡は当時の食器の頂点にたつものであり、埋葬された死者の生前の地位がわかります。



潮6号墳と7号墳（左上）の発掘状況



## 2 埋葬されたのは誰だ？ 中世（平安・鎌倉時代）

### (1) 平安時代の墓

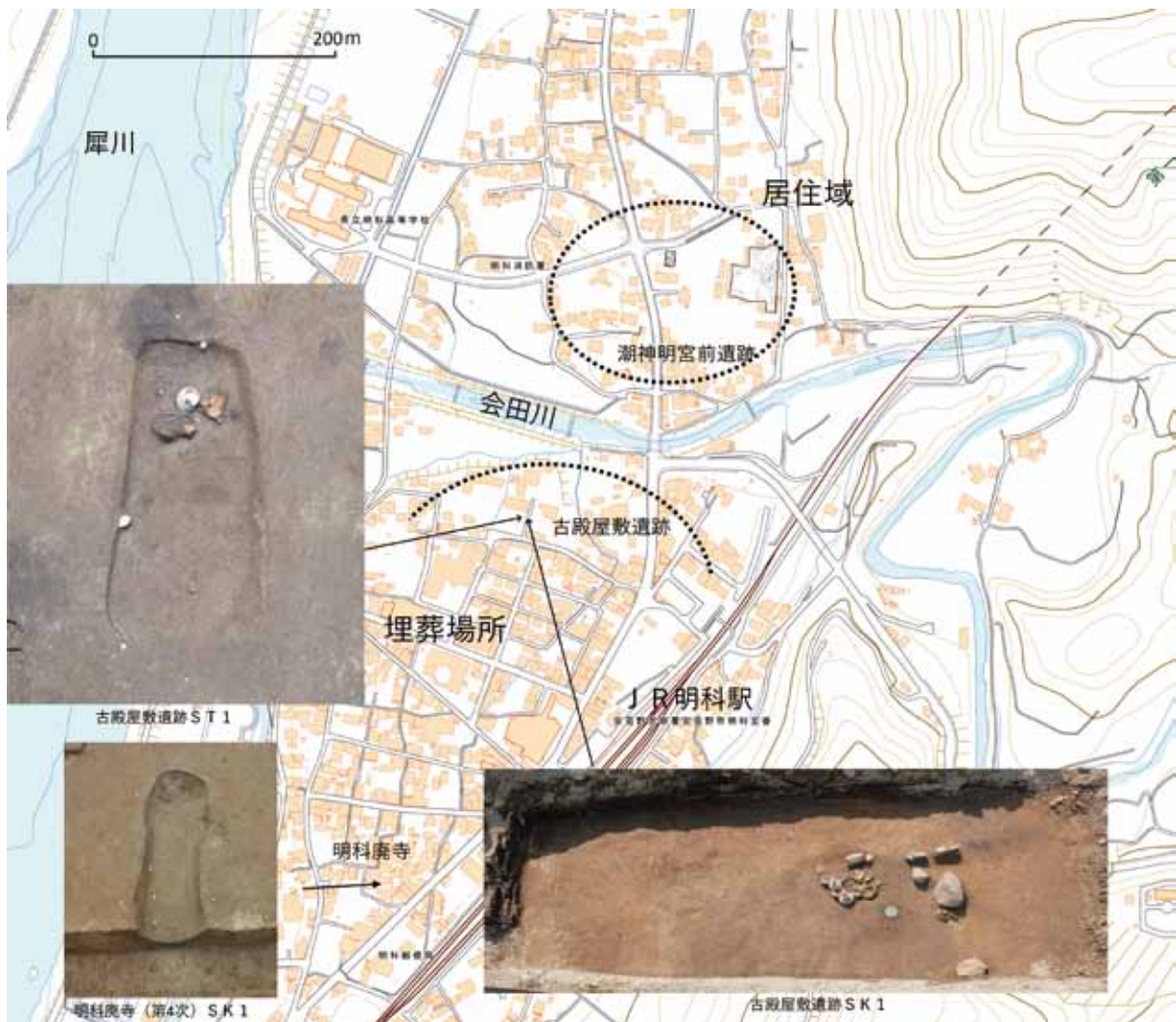
古墳の横穴式石室への埋葬や死者を送る儀式は、安曇野ばかりではなく信濃国全体で奈良時代には行われなくなり、その後200年近く、墓が発見されることはありません。

皇族や貴族たちは、記録から埋葬を続けていたことがわかります。発掘調査でも、横穴式石室とはちがい一人しか埋葬しない、小さな石室や木棺に遺体を納めた木棺墓が発見されています。このような土葬に加え、仏教とともに伝わった、火葬した骨を容器に納めた火葬墓が発見されています。ただ、貴族でも死者を埋葬した後に詣でることもなく、誰が埋まっているのか忘れ去られてしまいます。

下級貴族も含め一般の人々は、居住域から離れた野山、川や海の近くの、決められた場所に遺体を放置したといわれます。死体を地上にさらすことは、現在のわれわれから見ると、むごいことのように見えます。ただ、当時の人々は、遺体を決められた場所に置くことによって、生きている人々には崇らない、死者の国に無事に向かうことができると考えたのかもしれませんが。

ところが、9世紀後半から11世紀、信濃国では都と共通する木棺墓と火葬墓がわずかに発見されます。都と強く結びついた有力者、あるいは都からやってきた下級貴族が造ったのかもしれませんが。

### ①木棺墓



墓（古殿屋敷・明科廃寺跡）と居住域（潮神明宮前遺跡）



古殿屋敷SK1（木棺墓）出土遺物



同出土 瑞花双鳥八稜鏡

明科遺跡群古殿屋敷（明科中川手）で、10世紀代の二つの墓が発見されています。周辺で竪穴建物は発見されません。会田川を挟んだ潮神明宮前遺跡には居住域が形成されています。そこを経営する有力者たちの埋葬場所であったと思われます。

### 古殿屋敷SK1 木棺墓

一部は調査範囲外ですが、一辺1.6mと2.3m、深さ5cmの長方形に穴が掘られています。本来は当時の地表が高く、もっと深かったと考えられます。側面板と小口板と組み合わせた痕跡と、底面には三本の溝が発見されました。3本の枕木状の木の上に木棺が置かれたと推定されました。出土土器から10世紀に造られたと考えられます。

食器類は、木棺の外側に木箱などに入れられたのか、北西隅に一辺50cmほどの範囲にまとまって出土しています。それに対して瑞花双鳥八稜鏡が北側のほぼ中央から出土しています。木棺の内部、遺体の上に置かれたかもしれません。漆が塗られたサワラ材が付着しており、漆器箱に納められていたのでしょうか。置かれた位置から、鏡は死者にとって大切な品、死者の格を示す品といえます。食器は、土師器の杯が10点、脚の高い皿、緑釉陶器の碗と、液体を入れたと考えられる、口のかけた灰釉陶器の長頸瓶と小瓶、土師器の小型甕があります。松本市石上遺跡からも木棺とは別に箱に入れられた食器が見つかり、数多くの食膳具とともに灰釉陶器の瓶が発見されています。死者を埋葬する際の儀式の直会に用いられた食器を、一緒に納めたのでしょうか。

鏡が納められること、高級食器である緑釉陶器を直会に使用していることから、会田川対岸の人々をまとめる、かなりの身分の人、都から下った者が関わった埋葬であったと考えられます。

### ずいか そうちゅうはちりょうきょう 瑞花双鳥八稜鏡

外形を八稜形、背面の鈕の左右に鳳凰などの鳥を一对、上下に花文を配置し、圏線で内区と分け、外側に唐草文を配しています。唐鏡から和鏡へ移行する過渡的な鏡といわれます。2014年現在、長野県では34遺跡で47面が出土しており、出土遺跡数は日本一です。木棺墓からは、吉田川西遺跡（塩尻市）SK128、南栗遺跡（松本市）SK176、中村・外垣外遺跡（茅野市）SK1で出土しています。

### 古殿屋敷ST01 土壙墓

SK01から北へ8mほど離れた場所で、1.88m、0.7から0.9mの北を向く隅丸長方形の穴が掘られています。棺の部材や痕跡、釘等がないため、穴を掘って直接土葬する土壙墓とされましたが、穴の規模から考

えると木棺墓の可能性もあります。土師器の杯3点と、灰釉陶器の碗が、南に固まって置かれます。遺体との位置関係はわかりませんが埋葬の際の儀式に用いられた食器と考えられます。造られた時期はSK01よりやや新しく、10世紀後半と考えられます。

なお、骨や歯は、酸性土壌のため土に還ってしまうため発見されることが稀です。ところが土器の周辺から歯が発見されています。分析の結果、すべてが乳歯で永久歯が混じらないことから、1歳半から3歳までの間に死去した乳幼児のものと推定されました。他の遺跡でも、墓から乳歯の発見される例があります。

平安時代の墓に、どのような人物が葬られたのか、再検討を迫る調査例になりました。いずれにしても埋葬するのは死者でなく、生きている者です。



古殿屋敷遺跡ST01（土壙墓）  
遺物・人骨の出土状況

## ②土葬墓か？

### 明科廃寺（第4次）SK1

幅が0.6m前後、長さが1m程度の楕円形に掘られた穴です。明科廃寺では古代寺院が衰退した場所にぽつんと単独で掘られます。三角原遺跡でも、居住域の中に掘られました。遺物は、木棺墓と同様にある程度まとまった食器類が出土しています。ただ、幅が狭く木棺を納めることは難しそうですが、遺体をそのまま埋葬するには問題はなさそうで、土葬の墓でしょうか。造られた時代は、木棺墓と重なる10世紀から11世紀代です。

ただ、このような楕円形の穴は、遺跡を調査してもそれほど多くは発見されません。穴を掘ったりして埋葬された人物は、それなりの人物であったのかもしれませんが。

## ③火葬、そして火葬墓

『続日本記』文武天皇四年（700）、僧道昭が弟子に対して、自らが死んだら火葬にして散骨するよう指示します。これが始まりといわれますが、8世紀後半に下火になります。再び火葬は、9世紀後半から畿内の官人たちによって始まります。長野県では8世紀前半の岡谷市大久保B遺跡石組墓に火葬した骨が納められるほか、古墳に納められた例もありますが、短期間で見られなくなります。

9世紀後半、木棺墓と一緒に火葬墓も登場します。飯田市恒川遺跡群、岡谷市金山東遺跡、南箕輪村宮の上墳墓、塩尻市吉田川西遺跡で発見されていますが、数は多くありません。火葬された人物は木棺墓と共通した、都と強く結びついた人物と推定されます。



南箕輪村宮ノ上墳墓出土 蔵骨器  
灰釉陶器 短頸壺（南箕輪村教育委員会蔵）

### 南箕輪村宮ノ上墳墓

宮殿地籍の天竜川に下る大泉川の北岸で発見されました。最初に、一辺0.8~0.9mのやや隅が丸い方形の穴を掘り、その周囲と底にやや扁平な川原石を積み小石室をつくります。次に底に水平な扁平な石を敷き、その上に火葬骨を納めた灰釉陶器短頸壺を置き、二枚の灰釉陶器の皿を蓋としてかぶせ上部に扁平な石が置かれます。火葬骨はかなりの量があり、熟年以降の年齢が高い女性の可能性が高いとされます。平安時代後期に皇族の葬礼について記した『吉事略儀』に「・・・納御骨於茶碗瓶子・・・覆蓋白瓷・・・」とあります。瓶子（壺）に骨を納め、白瓷（灰釉陶器）の蓋で覆っており、正式な作法にそった埋葬です。灰釉陶器の年代は9世紀後半と考えられます。

## (2) 鎌倉時代

1100年を境に、人々がどのような暮らしをしていたのか発掘調査でわからない時代になります。それでも、地域の有力者の経営拠点と思われる遺跡から、中国から輸入された陶磁器などが発見されます。ただ、墓はほとんど発見されません。わずかに古瀬戸の四耳壺などを蔵骨器とした火葬墓が造られます。その数は少なく、限られた武士や僧侶などがの墓と考えられます。

### 若澤寺元寺場

廃仏毀釈で廃寺となった若澤寺の、かつての伽藍があった元寺場が、白山頂上の近くにあります。調査によって、室町時代後半に白山信仰の拠点であったことがわかりました。ただ、火葬骨が納められた鎌倉時代の古瀬戸瓶子と四耳壺が発見されました。本来は酒器として作られた器が納骨容器に転用されたのです。骨は、分析によって別人で、ともに若い女性であることがわかりました。なお、四耳壺は、一度壊して納骨した後、漆で接着した痕跡がみられます。

麓の上波田に若澤寺参道の出発点となった仁王門に、鎌倉時代末、1322年（享和2）に造られた木造金剛力士像が安置されています。体内銘に「大旦那源重久 仏師善光寺妙海」とあり、源重久のような地元の有力豪族が関わった火葬墓の可能性がります。

## (3) 室町時代

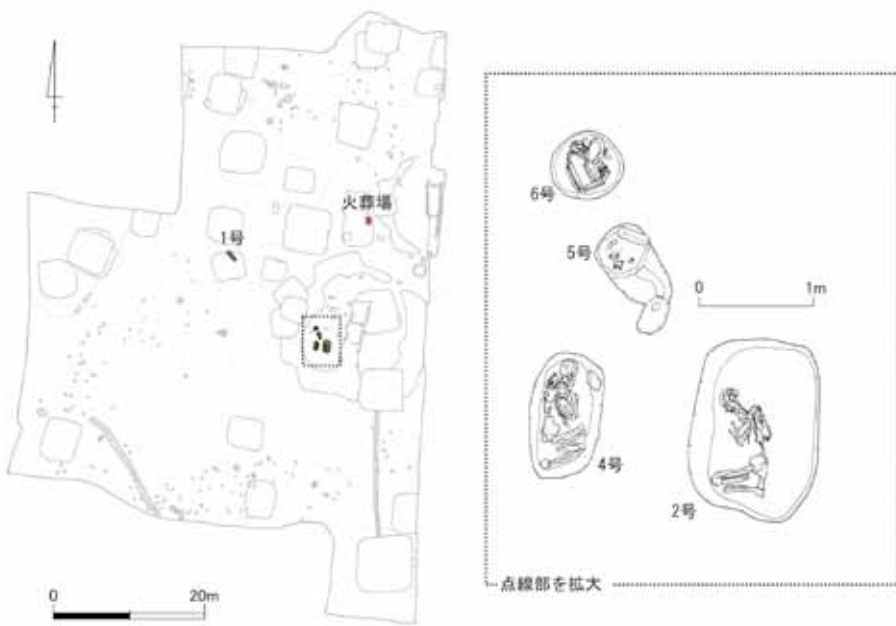
現在につながるような村の名前が登場します。発掘調査でも、掘立柱建物で構成されたムラと呼べそうな居住空間が発見されるようになります。

### 潮神明宮前遺跡

古墳や平安時代の竪穴建物跡を壊して、骨が入った穴がまとまって発見されました。遺体は折り曲げられ、そのまま、あるいは棺桶に入れられ埋められていました。5・6号は小さく座棺、1号は幼児、それ以外は壮年男子と思われます。六道銭として納められたか、5号からは洪武通宝、皇宗通宝が発見されています。



松本市若澤寺元寺場出土 蔵骨器  
上 古瀬戸 四耳壺  
下 古瀬戸 瓶子  
(松本市立博物館蔵 松本市波田公民館展示)



潮神明宮前遺跡 中世の土葬墓の分布

て埋め戻された火葬場、骨は拾われて他の場所に納められたと推定されます。北信地方では西向けの山の斜面を何段にも造成し、箱や曲物まげものに火葬骨を入れ、五輪塔をたてた空間、納骨霊場のうこつれいじょうが発見されています。村の人が埋葬されるようになったなかで、一握りの人は霊験あらたかな場所に納骨され、極楽浄土へ向かうことを願ったのでしょう。

後者は室町時代に中国明朝の初期、洪武年間（1368～98年）鑄造の銅銭で、日本では室町時代に流通します。墓もこの頃と思われます。2号と4号は遺体の上に石が入っています。埋葬した後で石が目印として置かれ、棺桶あるいは遺体が朽ちた際に落ち込んだものではないでしょうか。この場所は江戸時代になると水田となります。墓であることは忘れられてしまいました。

なお、人骨と焼土、炭が混じった土が充満した穴が発見されています。拾骨が終わって



潮神明宮遺跡の中世の土葬墓

上段 左 2号 右 4号（石を外す前）  
下段 左 6号 右 5号（銭貨の埋納あり）

## 3 家の墓の時代 近世から現在

### (1) 家の墓の登場 江戸時代

大名や大きな商家などで、家名や、財産、家業を子孫が継承していく「家」が成立します。「家」にとっていちばん大事なことは世代を超えての存続です。その精神的な支柱が先祖でした。そのため、先祖の誰々であると確認できる戒名や名前が刻んだ石塔が、「家」単位にまとめ立てられました。「家」の墓地の成立です。玄向寺（松本市）にある松本藩主水野家の墓所は、松本平の最も古い「家の墓地」といえます。江戸時代後半、豊かになった農民にも「家」という認識が広がりました。安曇野市内の、共同墓地や水田の中に、石塔がまともって立つ「家」の墓地もこの頃できあがります。

ただ、遺体は、石塔の下ではなく、葬儀に続いて空いている場所に土葬されました。目印として石が置かれますが、そのうちに忘れ去られました。



松本藩主水野家墓所（松本市大村）



共同墓地（豊科）

### (2) 納骨と供養が一緒になった墓の登場 明治時代

それまで慣習だった「家」が、法律によって定められました。家を単位として戸籍を作り、戸主である家長が家族全員を統率する仕組みです。死者や墓の取り扱いも、明治民法第987条に「系譜、祭具及ヒ墳墓ノ所有権ハ家督相続ノ特権ニ属ス」とあるように家の長、家長が取り仕切ることに定められました。さらに庶民も「苗字」、そして家を持つことができるようになりました。この結果、墓地が増加し、特に都会では石塔を立てる空間と土葬のためのスペースが不足しました。加えて、伝染病などの保健衛生上の問題からも、都会では火葬の普及が進みました。大正時代には自治体が火葬場を設け、戦後は地方でも火葬が主になります。火葬した骨は、運びやすく納骨スペースも狭くてすみます。そこで都市部を中心に、「〇〇家之墓」と刻み、焼骨を納めるカロートと呼ばれる納骨空間を内部に備えた角柱の石塔が登場します。



墓地（豊科）



墓地（堀金）



安曇野市営 穂高墓地公園



安曇野市営 堀金霊園

古代から近世までなかった、死者を納める施設と、先祖を供養する施設が一体化した墓の登場です。

### (3) 霊園の登場 昭和から現在

戦後、「〇〇家之墓」は地方にも浸透してきます。安曇野の水田の中の墓地にも、江戸時代以来の花崗岩の夫婦の戒名がはいった石塔が数多く立つ中央に、昭和60年代建立の「〇〇家之墓」と刻まれたひとときわ高い御影石の石塔が、その横には墓誌が立てられるようになります。

高度成長期、近代化や都市化とともに、家族の形態や庶民の生活が変化すると、ビジネス上の要請も重なり、非常に合理的な施設である霊園が造られはじめます。市営の霊園は、小さな区画の中に規格化された「〇〇家之墓」の石塔と墓誌が、整然と並んでいます。

### (4) 現在の墓は？

立派な石塔が林立する共同墓地の中に、草が繁茂して管理者もはっきりしない、荒れ果てた区画を目にすることがあります。まわりからは、「この先、お墓を維持管理する子どもがいない」、「子どもには託したくない」、「父母の墓参りなどがままならない」など、お墓の将来を心配する声が聞こえてきます。さらに、家の墓を処分する「墓じまい」も話題になります。

戦後の民法が否定した家制度ですが、70年かかって、「家は継承するのがあたりまえ」から、多様な生き方を自由を選べる時代になってきた結果かも知れません。死後の埋葬にも「自分らしさ」や「個性」を求める傾向もみられます。90年代から自然に還る樹木葬がはじまりました。これまでの家の墓を守ることに何の疑問を感じない時代が大きく変わろうとしているのです。

公営墓地も変化がみられます。市営穂高墓地公園は、共同で多くの方の焼骨を納められるよう合葬式墳墓が建てられました。合葬式墳墓の中は、他の方の遺骨と一緒に納骨する共同埋葬室と、骨壺が棚に一定期間



安曇野市営 穂高墓地公園 合葬式墳墓



寺院の永代供養墓

